

本翻訳は 2020 年 4 月 28 日にカーネギー国際平和基金 (Carnegie Endowment for International Peace) から発表された "Polarization and the Pandemic" の第 8 章 "Thailand: Shared Frustrations, Enduring Divisions" を日本語訳したものです。

原文 URL

<https://carnegieendowment.org/2020/04/28/thailand-shared-frustrations-enduring-divisions-pub-81642>

2020 年 4 月 28 日

## タイ国：フラストレーションの拡がり と 根強い社会の分断

ジャンジラ・ソンバットプーンシリ

*新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、これまでのところ、タイの分極化に拍車をかけてもいないが、緩和する方向にも働いていない。それは、危機に対する認識の違いの裏には強力なイデオロギーの対立の存在があることを示している。*

新型コロナウイルスの大流行は、タイでここ数十年来見られてきた二つの政治陣営間の分断に対し、様々な影響を与えてきている。その二つとは、タイ王室による統治を是とする現体制肯定派と、現在の政治制度は民主主義と相容れないと考える反体制派のことである。今回の危機下にあっては、両陣営の支持者が現政権の対応の無策や遅れに対するフラストレーションを共有することが往々にしてあった。にもかかわらず、政治的、社会的断層は変わらずに残ったままである。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、親体制派の中に亀裂が生じたことにより、これまでの分極化の力学にも変化が生じてきている。タイは、中国に続き、2020年1月13日に新型コロナウイルス国内感染者の存在を公表した初めての国であるが、政府の対応は鈍く、かつ方向性の定まらないものに終始した。これは、主として与党連合の内部の内輪揉めによるものと考えられる。例えば伝統的に親体制の盤石な支持を持つ公衆衛生部門のリーダー達は、予防措置として国境管理のより一層の強化を進言したのだが、政府は聞く耳を持たなかった。医療関係者は、政府の怠慢を公然と批判したが、これが、体制側エリート間

のさらなる分断を招いた。この内部対立と対処すべく、政権は、最終的には2020年3月半ば、パンデミックへの政策対応を公衆衛生部門に任せる結果となった。

その間、王室支持派は、プミボン先王の例に倣い、王室が危機の緩和にこれまで以上に大きな役割を果たすことに期待を寄せていた。ある王室支持者は自らのフェイスブックで、国難にある国民のために現国王が果たすべき責務を果たしていないと批判するコメントを投稿している。この種の保守強硬派が王室を公然と批判することは稀であり、体制派内の力学が変化しつつあることを反映している可能性がある。

社会全体に目を向けると、政府の不十分な公衆衛生政策や、ロックダウン継続による経済への影響に対する怒りが、政治的立場を超えて全国民の間に広がっている。短期的には貧困層がパンデミックによる経済停滞からもっとも深刻な影響を受けてきているが、さらに、親体制派の柱であった都市の中産階級も、時間の経過とともに影響を受けるとみられている。さらには、パンデミック絡みの政府の汚職に関する数多くのスキャンダルも、中産階級の間の政府に対する怒りや不信の増大に油を注いでいる。顕著な事例の一つとして、ある大臣の側近が、政府がマスクの国外輸出を禁止しているにもかかわらず、何百万枚というマスクを貯め込み、中国に輸出したのではないかというスキャンダルがある。

政府の危機対応の拙さに対する不平不満は、国民間の様々なグループに共有されているものの、各グループ間にイデオロギー的な分断があり、エリート・層の間でも、全社会的にも、有意義な集団横断的な協力を妨げてきている。体制派、反体制派双方の市民社会グループが、それぞれ独自の慈善活動を展開しているが、コーディネーションがうまく取れているとは言い難い。それどころか、両陣営の支持者達は折に触れ、反対側陣営の人道的努力を、オンライン、オフラインを問わず、貶めてきている。今回のパンデミックは、タイ人のアイデンティティという、意見がぶつかり合うところの多いテーマについての論争の再燃をも招いている。反体制派は、政府の対応のお粗末さは、タイ人のアイデンティティに対する排他的で保守的な見方に起因していると批判する。こうした批判に対し、親体制派は、自分達の国民としてのアイデンティティは、パンデミック危機を乗り越えるために必要な国の結束を生み出す一助となっていると反論している。

更に、こうしたイデオロギー的な分断は、ロックダウンや、脆弱なコミュニティの状況に対する二極化した姿勢を生み出している。親体制派の側には、ほぼ間違いなく、ロックダウンや

非常事態体勢に対してもっと権威主義的なアプローチをとるべきだと主張する傾向があるのに対し、反体制側のリベラルなグループからは、健康危機への対応であっても、基本的人権や個人の自由が優先されるべきだという議論が聞かれている。同様に、反体制陣営のメンバーの多くは、貧困層に対して同情的であり、その気持ちを共有しない人たちに対して不満を抱くようになる場合がある。対照的に、保守派の中には、富は善行を施す精神から得られる結果であり、貧者に無条件の救済措置を提供することに反対し、むしろ、今回の危機は生き残れるかどうかの試練だと主張する人たちもいる。

要約すれば、新型コロナウイルス・パンデミックは、タイ国民の間の分極化を促進してもいないし、両者間の歩み寄りを促してもいないと言える。むしろ、国民の間のイデオロギー的亀裂が、危機の現実に対して異なった認識を導き出すほどに、根深く、強烈なものであることを浮き彫りにする結果となっている。

ジャンジラ・ソンバットプーンシリは、ドイツ・グローバル地域研究所 (*German Institute of Global and Area Studies, GIGA*) のアソシエート・フェローであり、タイのチュラロンコン大学アジア研究所の研究者である。

(JCIE 監訳)

お問い合わせ

(公財) 日本国際交流センター

東京都港区赤坂 1-1-12 明産溜池ビル 7F

jcie-democracy@jcie.jp (@前空白を削除)